

サイレージ用とうもろこし畑
におけるキクイモ防除対策



写真1 キクイモの花

引用：植調雑草大鑑

キクイモは多年生の雑草で、8〜12月にかけて黄色い花を着け、秋ごろには1〜3m程の大き



写真2 10月下旬のキクイモ

きさになります(写真1)。道端やほ場周辺に自生していたものが、サイレージ用とうもろこし(以下、とうもろこし)畑で雑草化している状況が確認されています。
塊茎(イモ)により繁殖するため、以下の問題があります。①とうもろこしより発生が早く、発生期間が長い、②とうもろこしより生育が旺盛

で、養分収奪・光合成阻害が懸念される(写真2)。以下、キクイモの防除対策について紹介します。

1 キクイモの生態

とうもろこしのは種以前から地中にイモがあるため萌芽が早いです。また、萌芽にバラツキがあるため、3〜5葉期の防除後に新たに出芽する個体が多く、防除したにもかかわらずキクイモが繁茂してしまう大きな要因となっています(図1)。

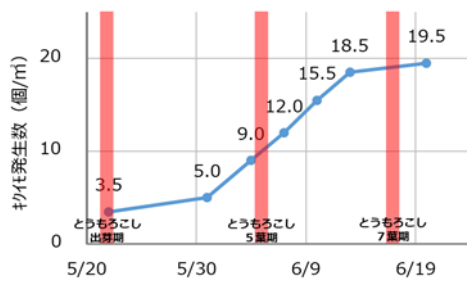


図1 キクイモ発生ほ場における発生数の推移
(普及センター十勝南部支所調べ R2年)

2 とうもろこしへの影響

キクイモによるとうもろこしの収量への影響を調査しました(表1)。キクイモ発生により、乾物収量が約

表1 発生の有無によるとうもろこし収量の比較

区	乾物収量(kg/10a)			莖短径(mm)
	総体	莖葉	雌穂	
発生無	1,765	1,145	621	20.9
発生有	1,388	696	692	18.3

※莖短径：地上5cm、径の短い側の太さを計測

(普及センター十勝南部支所調べ R2年)

22%の減少が確認された。特に、生育中期以降に茎が細くなることで莖葉の収量が低下することが示唆されます。

3 キクイモの発生に合わせた防除

図1のキクイモ発生数の推移から7葉期ごろにキクイモの発生数はピークを迎えており、この時期の防除が重要であると思われる。一方で、とうもろこし7葉期は1番草収穫が始まる6月下旬となることが多いです。

これらを考慮し、除草剤散布時期を6葉期に遅らせた試験(供試薬剤：アルファード、薬量：150g/10a)を行ったところ、キクイモの発生数が抑えられ、とうもろこしの生育への影響は少なくなりました(図2)。

4 防除例および注意点

これらの結果から、キクイモ発生ほ場において、6葉期にアルファードを散布することで防除効果が期待できます。

しかし、キクイモは気象条件によって発生数や草勢が大きく変わります。3〜5葉期の時点でとうもろこしの生育を阻害している場合はシャドーによる防除を実施し、その後も発生に合わせて適宜防除を行います。

また、キクイモは土中深くにも存在するため、地表に処理層をつくる全面土壌散布は防除効果が低い傾向にあります。雑草莖葉散布を中心に防除体系を組みましょう。

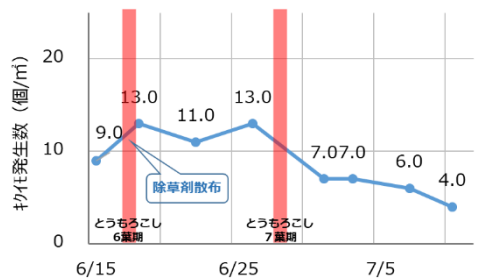


図2 6葉期防除後の発生数の推移

(普及センター十勝南部支所調べ R3年)